

コミュニケーションから見た言語の二面性

理論・対照研究領域 窪 蘭 晴 夫

■ 言語とコミュニケーション

- 言語の第一の目的はコミュニケーションである。
- 音声コミュニケーションではプロソディー（アクセント・イントネーション）が重要な役割を果たす。

■ プロソディーによる曖昧性の解消

1) 語の曖昧性とアクセント

- アメ: 雨、飴 
- ハナ: 華(人名)、花、鼻 
- ハシ: 箸、橋、端 
- イワテサン: 岩手さん、岩手山、岩手産
- オショクジケン: 汚職事件、お食事券

2) 複合語の曖昧性とアクセント



例: 日本舞踊協会 / 中国文化大学 / 国民性調査

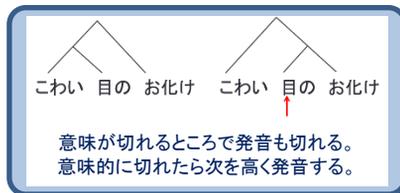
3) 句構造の曖昧性とアクセント

- 「いい加減」
 - ① あの人どんな人?
→ いい加減な人 {いいかげん}
 - ② 湯加減どうですか?
→ いい加減だ {いい} {かげん}
- 「朝ご飯にする?」
 - ① お腹空いたから、そろそろ{あさご飯}にする?
 - ② パンも飽きたから、{あさ}、{ご飯}にする?

4) フォーカスとイントネーション

母親: 太郎は**子供**じゃない(=子供だ)。
 父親: 太郎は子供じゃ**ない**(=子供ではない)。
 cf. 近畿方言: **アホ**ちゃう(=アホだ)。
 アホ**ちゃう**(=アホではない)。

5) 統語的な曖昧性とイントネーション



意味が切れるところで発音も切れる。
 意味的に切れたら次を高く発音する。



類例: 「青い縞模様のシャツ」「太郎と花子のお母さん」
 「図書館にある本を運んだ」「あの人に気をつけろと言った」
 「あの犬の小屋」「織田信長／信成は死んでいません」



■ プロソディーの多様性

1) アクセントの地域差

※赤字を高く発音

	大阪(多型)	東京(多型)	鹿児島(二型)	小林(一型)
雨	アメ	アメ	アメ	アメ
飴	アメ	アメ	アメ	アメ
橋	ハシ	ハシ が	ハシ	
箸	ハシ	ハシ が	ハシ	ハシ
端	ハシ	ハシ が		
岩手さん	イワテサン	イワテサン		
岩手山	イワテサン	イワテサン	イワテサン	イワテサン
岩手産	イワテサン	イワテサン		
汚職事件	オショクジケン	オショクジケン	オショクジケン	オショクジケン
お食事券	オショクジケン	オショクジケン	オショクジケン	オショクジケン

2) イントネーションの地域差

- 東京・大阪: 疑問文は文末でピッチを上げる
- 名古屋: 文末の疑問詞は下げる
「それ、なに**に**??」「あれ、だ**れ**??」
- 鹿児島: 疑問文はいつも文末を下げる
「わかる**に**??」「うん、わかる」
「くる**に**??」「うん、くる」
「大丈夫**に**??」「うん、大丈夫」
「ぞう(象)**に**??」「うん、ぞう」



■ 結論

- 言語は**コミュニケーション**と**多様性**の二面性を持つ。
- 「**コミュニケーション**」のためには、人間の言語は単一というのが理想的。方言もない方が良い。
- その一方で、言語は変化し「**多様性**」を持つ。その多様性が言語差、方言差、世代差となって**コミュニケーション**を阻害する。
- プロソディーも同様。プロソディーは音声コミュニケーションに不可欠である一方で、その**多様性**がしばしば**コミュニケーション**の障害(誤解)を引き起こす。